

## ワークショップ「現代自然主義とアリストテレス」

植原亮（関西大学）

松浦和也（秀明大学）

立花幸司（熊本大学／オックスフォード大学）

### 概要・趣旨説明

哲学的自然主義の起源はアリストテレスに求められるといわれる。しかし、現代の自然主義の流れは、クワイン以降をメインとするか、あるいはせいぜい米国の哲学の伝統を描くために古典的なプラグマティズムにさかのぼって語られることが多く、アリストテレスが引き合いに出されるのは、たいていは自然主義が哲学における正統的な伝統であることを強調するためだといえるかもしれない。

たとえば、オーガナイザの植原による二著『实在論と知識の自然化』と『自然主義入門』はそれぞれ、哲学的自然主義を方法論的スタンスとして体系的な理論構築を行う著作と自然主義についての入門的解説の試みであるが、いずれもアリストテレスの名はほとんど出てこない。前者の『实在論』の本文中では、アリストテレスは人工物についての反实在論的・規約主義的な主張を提出した重要人物の一人として登場するのみであり、後者の『入門』では、本文では自然種概念の原型を示した哲学者としてわずかに、そして「あとがき」でまさに自然主義の歴史の始まりに位置する人物として、ごく手短に触れられているだけである。

では実際のところ、アリストテレスと現代の自然主義との間にはいかなる関連が見出されるのか。現代の自然主義は、もはやアリストテレスとの直接的な結びつきを断ったままでも進めることのできるプログラムというべきなのだろうか。こうした疑問を検討することが、このワークショップの狙いのひとつである。

そこで本WSでは、この3人の提題者のうち2人（松浦と立花）は、アリストテレス研究を手がかりとしながら現代の自然主義が伝統的な哲学にとってどのような含意をもつかを明らかにすることを目指す。松浦はアリストテレス自然哲学の研究に掘りつつ提題を行う。人工物に関するアリストテレスの主張として解釈されてきた学説にあらためて検討を加えることで、人工物と自然という主題に光を当てる。立花は道徳について論じる。道徳の自然化は近年著しく進みつつあるが、倫理学においては、やはりアリストテレスを始祖とする徳倫理学の復興が目覚ましい。立花は、アリストテレスが行った道徳研究の方法論に注目しながら、道徳における自然主義について提題を行う。植原は、両者の提題に先立って、現代の自然主義を一定の観点から概観することで検討の素材を提供し、また近年の動向について若干の補足を加える。